

[水田作部門]

2. 水稻「きぬむすめ」の良食味生産のための葉色の目安

[要約]

「きぬむすめ」の良食味生産のための葉色（SPAD値）の目安は、幼穂形成期と出穂10日前が27～36、出穂期が26～34、出穂10日後が27～36、出穂20日後が24～34、出穂30日後が15～27であり、葉色がこの範囲で推移すると食味値（HON）が80以上となる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 作物・経営研究室

[連絡先] 電話086-955-0275

[分類] 情報

[背景・ねらい]

2014年に本県の奨励品種に採用された水稻品種「きぬむすめ」について、良食味米となる幼穂形成期以降の葉色を明らかにし、肥培管理の資料とする。

[成果の内容・特徴]

1. 幼穂形成期以降の葉色は蛋白質含有率及び食味値(HON)と強い相関がある（表1）。
2. 幼穂形成期と出穂10日前の葉色が27～36、出穂期が26～34、出穂10日後が27～36、出穂20日後が24～34、出穂30日後が15～27で推移すると、蛋白質含有率が7.0%未満で食味値が80以上の良食味となる（図1）。
3. 上記2より葉色が濃く推移した場合、食味値の低下に加え、生育過剰により未熟粒が増加し、検査等級が2等以下になりやすい（データ省略）。
4. 食味値90、蛋白質含有率6.5%を目標に葉色を管理した場合、520kg/10a程度の収量が見込まれる（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. この成果は、穂肥施用の判断に利用でき、葉色が濃い場合は穂肥無施用とする。また、穂肥を施用する場合、窒素成分で2 kg/10a施用すると葉色はSPAD値で2程度濃くなる。
2. 赤磐市において6月中旬移植栽培で穂肥を0～4 kg/10a施用した結果である。

[具体的データ]

表 1 幼穂形成期以降の葉色（SPAD値）と食味関連形質の相関係数（2012～2014年）

	移植 30日後	幼穂 形成期 ²	出穂 10日前	出穂期	出穂 10日後	出穂 20日後	出穂 30日後
蛋白質含有率	0.11 n.s.	0.76 ***	0.74 ***	0.78 ***	0.91 ***	0.90 ***	0.91 ***
食味値(HON)	-0.11 n.s.	-0.73 ***	-0.74 ***	-0.77 ***	-0.88 ***	-0.88 ***	-0.88 ***

注) n=148、***:0.1%水準で有意、n.s.:有意でない

葉色はSPAD502で出穂前は展開第2葉、出穂期以降は止葉を20株測定

蛋白質含有率（水分15.0%換算値）及び食味値（HON）はNIRS-6500で測定

² 幼穂形成期は出穂の21～23日前頃

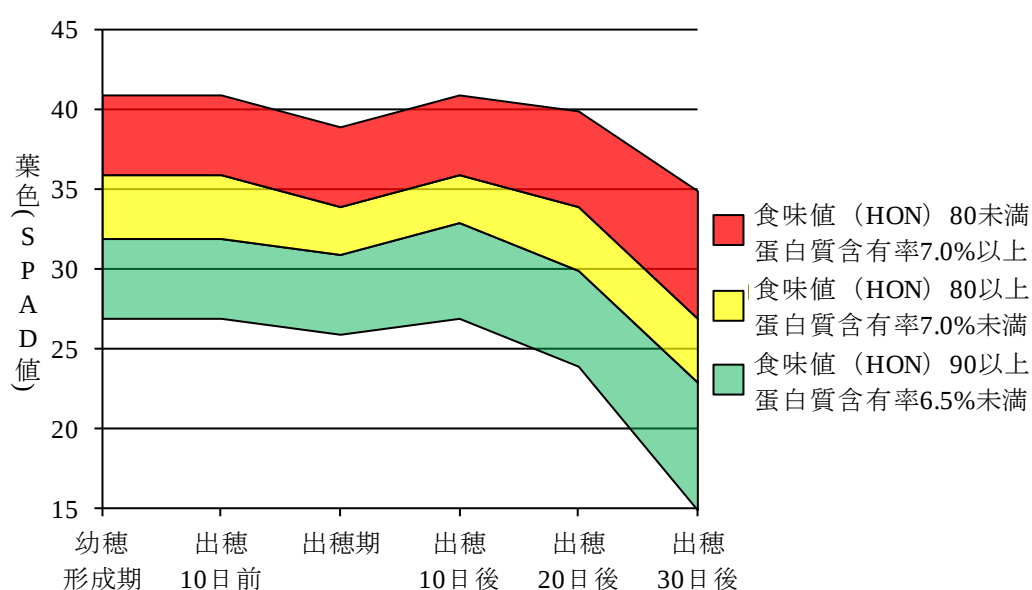


図 1 幼穂形成期以降の葉色の推移と食味関連形質の関係（2012～2014年）

[その他]

研究課題名：きぬむすめ、にこまるの高品質生産技術の確立と温暖化対応品種の選定

予算区分：県単（産学官連携推進事業）

研究期間：2012～2016年度

研究担当者：井上智博、前田周平、妹尾知憲

関連情報等：1) [平成23年度試験研究主要成果、1-2](#)

2) [平成24年度試験研究主要成果、1-2](#)

3) [平成24年度試験研究主要成果、3-4](#)

4) [平成24年度試験研究主要成果、5-6](#)

5) [平成26年度試験研究主要成果、3-4](#)